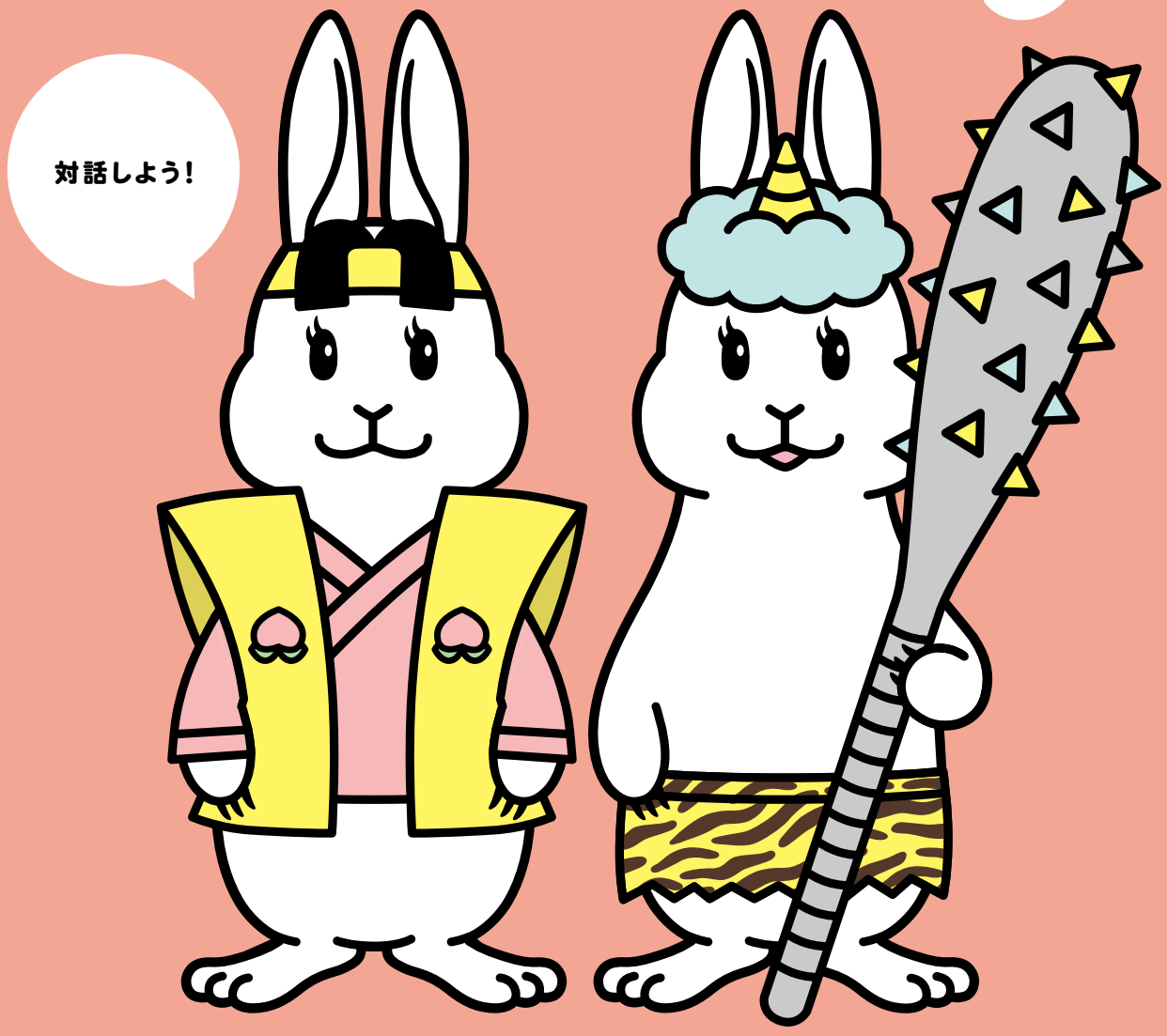
世田谷パブリックシアター
三軒茶屋発、地域の劇場による活動紹介冊子［キャロマグ］
Vol.20 Mar.2024
2024年3月号

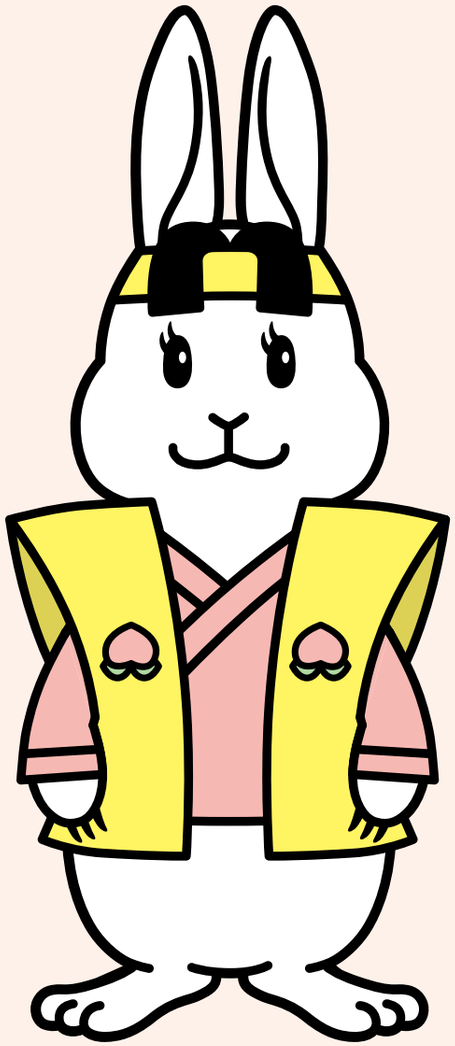
CarroMag.



レポート

中学生演劇部2022/2023

『キャロマグ』ってなに？



三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、ちょっとややこしいのですが、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」（600席）と「シアタートラム」（200席）という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、世田谷パブリックシアターの活動はこうした劇場での上演活動に留まりません！

3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを「学芸事業」として行っています。キャロマグは、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期でご紹介する冊子です。オレンジ色のキャロットタワーにある劇場の冊子だから、キャロットマガジン。それを短くしてキャロマグ（CarroMag）。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。 一気にいろいろご紹介はできませんけれど、これをお読みのみなさんに、少しずつ世田谷パブリックシアターの活動を知って頂きたいと思っています。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。

CarroMag. Vol.20 | Mar.2024

CONTENTS

レポート

「世田谷パブリックシアター 中学生演劇部2022/2023」

はじめに …… 2

中学生が「日常の困難」に演劇で立ち向かう

石川惠理（世田谷パブリックシアター学芸）

2022年度中学生演劇部 対談 …… 4

2022年度中学生演劇部『レビューショー 私が私であるために〜子どもの権利条約より〜』をふりかえる

参加した中学生にインタビュー2022「のの」 …… 9

2022年度創作プロセス …… 10

2023年度中学生演劇部 対談 …… 13

2023年度中学生演劇部『ミュージカル 桃二郎』をふりかえる

参加した中学生にインタビュー2023「まり」 …… 17

2023年度創作プロセス …… 18

参加した中学生にインタビュー2022/2023「もっちィー」 …… 21

エッセイ …… 22

世界を変える、意思表明としての演劇

〜世田谷パブリックシアター中学生演劇部の作品をふりかえる

滝口 健（世田谷パブリックシアター劇場部マネージャー）

CarroMag. Information

2024年度世田谷パブリックシアター学芸事業 …… 27

おまけマンガ『たまにはこんな役 #20』

学芸スタッフから

中学生が「日常の困難」に演劇で立ち向かう

石川惠理（世田谷パブリックシアター 学芸）

「世田谷パブリックシアター中学生演劇部」は、いろいろな学校から中学生が集まり、一緒に演劇をつくるワークショップです。1年間を3期に分け、不定期ですが通年で活動を実施しています。第1期と第3期は短期のワークショップを行い、第2期は2ヶ月かけて演劇作品を創作するワークショップを行っています。創作した作品は、世田谷区立中学校演劇部が発表を行う「世田谷区立中学校演劇発表会（以下、区大会）」にて上演します（＊1）。

今回のキャロマグでは、第2期のワークショップ（2022年度、2023年度）を特集します。両年度共に世田谷パブリックシアター契約進行役の大道朋奈さんが進行し、大道さんの目指す「日常で考えることが大変なテーマについて、演劇で楽しく考えること」を目指して、作品作りに取り組みました。その手がかりとして、2022年度は「子どもの権利条約」、2023年度は「対立／対話」を題材にして、中学生自身が日常で思っていることを話し合ったり、自分とは立場の違う誰かを想像したりしながら、作品を創作しました。

ワークショップに集まった中学生たちは、上演作品を作る過程で、多くの時間を話し合いに費やしました。「日常で考えることが大変なこと」を話し合い、演劇づくりに取り組むのは、中学生にとって、とても大変なことです。「子どもの権利条約」を扱った2022年度では、中学生自身が権利について考えたとき、先生や親との関係の中で、自分が納得いかないことでも押し通されてしまうと感じていることや、自分の身近にいて苦しんでいる友人についてのエピソードが出てきました。いずれも、中学生という立場で、今すぐに解決できる問題ではないことがほとんどです。

また、「対話／対立」を扱った2023年度には、桃太郎に出てくる村人と鬼が戦わずに解決する劇を創作したあとで、「戦わないで話し合って解決するということはどういうことか」と話し合いをしました。兄弟や友人との間で起こる対立のエピソードが多く、違う立場の他者と分かりあう難しさを話してくれましたが、話してくれた中学生自身の思いも強く、客観的に捉えることは困難なようでした。

けれど、中学生たちは、日常で感じていることを言葉にし、お互いにどう思っているかを伝え合うことに、根気強く取り組んでいました。1人では考えることが難しいことでも、演劇づくりを通してお互いに話をする中で、自分自身がどう思っているのかを相対的に理解したり、抱えていた悩みや不安を分かち合ったりしていきました。また、今すぐに解決が難しいことも、自分を客観的に捉えなおすことで、中学生なりの最適解を見つける機会にしてくれていたように感じました。

中学生同士でたくさん話して、思いを伝えあっていると、「作品を通して、観客に自分たちの思いを届けたい」という思いも高まります。区大会は、世田谷区立中学校の演劇部が出場する大会なので、中学生同士が作品を見合います。中学生たちは他の学校の上演すべてに対して、1人ずつ感想を書きます。「世田谷パブリックシアター中学生演劇部」の作品に寄せられた感想は、「面白かった」などの劇の感想だけでなく、観客の中学生が自分自身のことも顧みて考えてくれたであろう言葉が多くありました。その感想を読んだ参加者の中学生からは「自分たちの言いたいことが伝わってよかった」などの声があがりました。作品を見合うことで中学生同士の交流が生まれることも、この中学生演劇部 第2期のワークショップの特徴です。

演劇づくりを通して、たくさん話し合い、思いを伝えあい、交流したこの経験は、このあとの日常で「大変なこと」に出会ったとき、それを乗り越えていける手がかりとなると信じています。

最後になりますが、現在、世田谷区は、スポーツ庁と文化庁が策定したガイドラインに則って進められている「部活動地域移行」の流れの中で、2022年度より区内の中学校部活動の地域移行のあり方を検討しています。そのため2023年度は、世田谷区教育委員会と協力して区立中学校部活動トライアル事業としてワークショップを実施しました。世田谷区教育委員会との連携によって、世田谷区内全校の保護者に配信されるメールマガジン「すぐーる」での広報も可能になり、より多くの世田谷区民の中学生にワークショップを周知することが出来る機会となりました。「部活動地域移行」については、これから地域全体でいろいろな形を考えていく必要があります。世田谷区の劇場として、これからも中学生へのさまざまな演劇の機会をつくり続けたいと思っています。

＊1　企画・経緯の詳細につきましては、キャロマグ6号の特集「世田谷パブリックシアター中学生演劇部　中学生の部」、10号の特集「世田谷パブリックシアター演劇部　中学生の部　第二期 2015/2016」をお読みください。

2022年度

中学生演劇部
「レビューショー 私が私であるために ～子どもの権利条約より～」をふりかえる

2022年度の中学生演劇部は、「子どもの権利条約」を出発点に、夏の終わりから秋にかけてワークショップを14回重ね、「レビューショー 私が私であるために～子どもの権利条約より～」を作り上げ、世田谷区立中学校演劇発表会で発表しました。「レビュー」と「子どもの権利条約」という異質な組み合わせで、どんな化学反応が起きたのか。また、中学生たちにとってワークショップの場がどういう意味を持っていたのか。進行役と進行役アシスタント、学芸の3者で振り返りました。

大道朋奈（ともにゃ）＆**小林 遼**（ガイ）＆**学芸**

なぜ権利条約か、なぜレビューか

学芸　まず「子どもの権利条約」をテーマにした理由を教えてください。

大道　私が世田谷パブリックシアター契約進行役として区内の小中学校に行くときは、教科「日本語」(＊1) の「表現」の単元を担当することが多いんです。中学2年生には「子どもの権利条約」(＊2) について演劇を通して考えるという内容があって、世田谷パブリックシアターが執筆しているので、その授業の進行アシスタントで入る機会が多くあります。
授業では、生徒たちが権利とは何か悩んでいたり、私もどうアドバイスしたらいいか迷ったりということがあって。私自身「権利」についてあまり分かっていないかも、中学生と一緒に改めて考えたいなと思ったんです。権利ってそもそも誰もが持っているものなのに、自分に権利があることに気づきにくい。でも、権利について知っていると自分を守ることができる。権利について演劇を通じて知ったり考えたりしていくのは面白いと思って、中学生演劇部のテーマにしようと考えました。

学芸　「子どもの権利条約」というテーマと同時に、レビュー形式でやることを提案してくれましたが、そのアイデアはどこから来たのでしょう？

大道　「子どもの権利条約」って、「差別の禁止」や「プライバシー・名誉の保護」など40以上の条文があるんですが、学校の授業時間内ではどうしてもその内のいくつかしか扱えないんです。全部取り上げてみたいなと思っていました。ただ、ワークショップは授業より時間はあるけれど、無尽蔵ではない。それで、レビュー形式だったら全部の条文を扱えるんじゃないかという漠然としたアイデアが浮かんだんです。レビューって、歌とかダンスとか、いろんな形式で、いろんなものを短くたくさん表現することができるんですね。だから、大切な条文をわーっと並べるのに、レビューはぴったりかも！ と思いました。あと、条約とどう向き合うかを考えていた時、井上ひさしさんの言葉「むずかしいことをやさしく～」(＊3) を思い出したんです。レビューという軽やかな形式で「子どもの権利条約」という難しくなりがちなテーマを扱うのは良いかもと思いました。また、もう一つの理由は単純に、宝塚が好きだから（笑）。

マッチ売りの少女を救え！

学芸　ワークショップの初回は互いを知り合うゲーム、そして『マッチ売りの少女』のお話を演劇にすることから始めました。

大道　台本のないところから演劇をつくる出発点として、まずは知ってるお話からシーンを立ち上げてみようと思っていました。どのお話にしようかと考えていて、『マッチ売りの少女』から始めるのが良いかなって思ったんです。

学芸　確かに、『マッチ売りの少女』の話を読み直すと、子どもはひどい扱いを受けやすい存在なのだということに改めて気づきましたね。

大道　そうなんです。だから、権利条約のことをやる前に、まずはそんな少女を自分たちなりに救うシーンをつくることを提案しました。

学芸　マッチ売りの少女が魔界にスカウトされたり、女優になってお金を稼げるようになったりと、飛躍もありつつ、中学生らしいアイデアがいろいろ出てきましたね。権利は、弱い立場の人を守るものだということをみんなで確認できて、権利条約を考える導入としてはとてもよかったんじゃないかと思います。

大道　2回目の終わりに、「子どもの権利条約」の条文をみんなに渡しました。はじめに全員でズラッと並んで、一条ずつ読んでいきました。とてもかっこよく読めたけど、でもみんな、「子どもの権利条約」にはあまりピンときてなくて。そこで、まずは権利条約の成り立ちを知

った方がいいかと思い、子どもの権利条約の父である「コルチャック先生について調べてくる」宿題を出しました。

小林　そして、3回目には調べてきたことをもとにコルチャック先生の「情熱大陸」風のシーンを作ったんですよね。コルチャック先生の名言を勝手に考えたりして、盛り上がりました。「子どもは国の宝だ！」は、ぜったい実際に言ってるよね、とか。

権利条約との距離感

大道　4回目には宝塚の演目『ベルサイユのばら』(＊4)の曲「愛あればこそ」の替え歌でテーマソングを作りました。フランス革命は民衆が立ち上がって権利をつかみ取る話だから、「子どもの権利条約」にもぴったりかなと思って。「♪愛〜それは〜○○」が元の歌詞なのですが、それを権利に言い替えて、○○に何を言ったら良いかのアイデアをみんなで出していきました。「♪権利〜それは〜得難く〜」っていうアイデアが出た時は、「得難いことはない！ みんなのものなんだから」なんて意見が出たりして、「♪権利〜それは〜気高く〜」になったりしましたね。この回は、車座になって、権利条約に関わりそうな普段の生活で思いついたことをみんなで話し合ったりもしました。

小林　家族とか友達のことがぽつぽつ出てきました。

大道　学校で差別を受けている人を見かけて心を痛めている子もいました。なんで障害のある子を別の学校にするんだ、大人になってから急に混ざれって言われてもできないじゃん、って言う子がいたり。

学芸　権利そのものでなくても、普段なんとなくもやもやしていることも出てきました。その後、『世界の子ども権利かるた』(＊4)をやりましたね。

小林　学校のこととか、家のこととか、身近な具体的な事例が描かれている絵札と、それにあてはまる条文の読み札で構成されたカルタで。

大道　カルタをやって、権利が侵害されている具体的な状況が想像できるようになったようで、みんなからいろいろな話が出てきました。特にジェンダーに関することが多かったですね。「女の子のくせにカブトムシが好きなのはおかしい！」とか、「男のくせにバレエ踊るなんておかしい！」とか。

学芸　でも出てくる話は、自分自身の話よりは「こんな人がいた」という誰かの話が多かったですよね。自分の権利が侵害されていると自覚して言葉にするのは難しかったのかもしれません。

小林　雑談では自分の話も出てくるんですけどね。自分のことを俯瞰することは難しそうでしたが、権利が侵害された話をいくつかシーンにしました。ワークショップを通じて他にもたくさんのシーンをつくったけれど、最終的に、発表ではこの時の3つのシーンが中心的な場面となりました。

「あったらいい権利」は何？

小林　「権利とは？」という話し合いをした時、権利と責任はセットだという意見を言う子どもたちが多かったことには正直驚きました。権利は誰にとっても生まれた時からあるものだから、身勝手に権利を主張していいのに。

大道　中学生たちは、窮屈だったり、違和感がある状況も、自分のせいだ、自分の努力が足りないからだ、権利なんか主張せずお行儀よくしていなくちゃいけない、って思わされているのかもしれないですね、日常の中で。誰もが元々持っている権利を堂々と主張していいのにと私も思っていました。そこで、「あったらいいな」と思う権利をみんなに考えてもらうように提案しました。

小林　テレビ見放題の権利とか、いろいろ出てきましたね。

大道　その権利が欲しいということは、今その権利がないって思っているということだけれど、「子どもの権利条約」をよくよく読むと、テレビ見放題の権利は、実は条文にある「適切な情報の入手」と「休み、遊ぶ権利」に関係しているかもと、みんなで再発見していきました。

小林　新しいオリジナルの権利を考えることで、実はすでに持っている権利が侵害されていることに気づくってことですよね。

学芸　「あったらいい権利」って一見個人的でわがままな権利に思えるけれど、世の中のみんなにも必要な権利かも、と話すことで気づいていきましたよね。今の子どもたちは、コミュニケーションをとるのがすごく上手だけれど、その分我慢して、衝突を避けるところがある。お互いを慮る人たちだからこそ、「あったらいいな」を考えることで、いい意味でわがままな部分を出しながら、権利を考えることができたプロセスでした。

身体から溢れる「怒り」ダンス

学芸　ダンスのシーンもつくりましたね。どうしてダンスをやろうと思ったんですか？

大道　クローズドの稽古場では話せても、お客さんの前では言えないこともありますよね。そういうときには言葉を使わず、身体で表現しても良いなと思って。もやもやしていること、自分の中に溜め込んでいることを、身体の一部分を使って空中に書くというワークをやったんです。何を書いたのか、言葉で確認はしませんでした。でも、その動き、身体には明らかに「怒り」が表れていました。「怒り」について言葉で語ってもらおうとすると、「(怒りは) ないです」「みんなに良くしてもらってる」という答えが返ってくるけれど。

学芸　普段はそういう感情を表に出さない子たちですよね。でも、言葉を使わないからこその「怒り」が出てくる。全身を使って語るぞ、っていう気概を感じました。彼らの本来的な強さが表れてましたよね。

大道　怒っていることを表明していいんだよ、っていう気持ちがありました。

小林　自分の思ったことをちゃんと表現できていたから、子どもたちもやっていて気持ちよかったんじゃないかな。

学芸　ダンスの最後で、みんなそれぞれ好きなポーズをとった後に、その身体を矯正しようとする人が出てきたら面白いんじゃないかってアイデアが子どもからでてきました。矯正する人が誰かは特に話し合わなかったけれど、みんな「大人」と思っていましたよね。「矯正する人＝大人」というのは、とてもリアルな感覚が表れたシーンだったかもしれません。

小林　彼らの話を聞いているときも、抑圧してくるのはたいてい大人でした。自分の親の話が一番多かったですね。自分と親の話は客観的に扱うことは難しいものだから、動きの中で抽象的に扱うことで、表現しやすくなったんじゃないかなと思います。

学芸　実際の経験を、対立構造の中で捉え直すことは大変なことですよね。そういう意味で、ダンスという手法は、中学生たちにとってとても良かったですよね。

自分たちの言葉

学芸　子どもたちが、作品の中に、自分たちのリアルな感じの言葉を入れたいと言いだしたのも印象的でした。

大道　それを受けて、「客席の中学生に向けた手紙」を書いてもらったり、「私にとって権利とは」という問いに答えてもらったりしました。みんな一人一人自分の言葉で語ってくれて、すごく良かったですね！ そこで出てきた手紙と言葉を劇のラストシーンとし、客席に向かって一人一人語ってもらいました。

学芸　区大会には、子どもたちの近しい人、友

達や親、先生が来ます。そんな中で自分の思ったこと、自身の生の言葉を発するのは勇気のいることだと思うんです。でも、とても堂々とやっていましたよね。

大道　この作品を作った後、不登校だと教えてくれた子がちょっとずつ親と話すようになったって、振り返りの時教えてくれたんです。それまでは学校に行けないことに後ろめたい気持ちがあって、親に対して言葉にするのは難しかったみたいなんですけど。

小林　そもそも「なぜ学校に行けないか、行きたくないか」って自分でもよくわからないと思うんですよね。それが、自分の思いをみんなで相談しながら演劇にすることで、相対化できたというのはあるんでしょうね。

大道　その子は手紙に自分の思いを書いて、ラストシーンで読み上げました。その子の家族も客席にいたそうです。その後、その子と家族の中でどんなやり取りがあったのかは分かりませんが、発表会のあと、新たな学校生活を送ることになったそうです。

他の人の話を受けとめる

大道　区大会本番の前に、「2ヵ月間、権利にしっかり向き合って、たくさんのことに気づいたんだから、今度はそれをほかの中学生たちに伝えてみよう」とみんなに言いました。

学芸　「伝える」ことに対するモチベーションはすごく高かったですね。終演後のアンケートでは、大人の観客からも共感が寄せられました。出演者のおばあちゃんからは、「子どもの時のことを思い出して、実はあれは権利を侵害されてたんだって気づいた、舞台上の子どもたちが権利を手にするのを見て勇気をもらった」という感想をもらいました。身近な人が劇を観て、受けとめてくれて、そのことを中学生たちに伝えてくれて、すごくいいなと思いました。

大道　中学生たちはみんな「わかんな〜い」って言いつつも、いろんなことをいっぱい考えていましたね。周りに気を遣えて慮れて、そしてよく世の中の違和感にも気づいていて。素晴らしい子どもたちでしたね。

小林　本当に。社会のこととか、外の世界のことをよく知っていたりもして、ある意味では大人っぽかったですよね。でも、一方で自分のことが見えていなかったりするところもあって。そんな彼らが演劇づくりを通して、仲間たちといっぱい話すことで、「自分の意見が違っていたかも」って素直に他人の意見を受け入れたりしているのも、とてもいいなと思いました。

学芸　ほかの人の話もよく受けとめていましたよね。

小林　身体での表現や、「あったらいいな」権利を考えてみるといった、固定観念にとらわれない「自由さ」を彼らに提示することが、彼らには良かったんじゃないかなと。条文から言葉で組み立ててシーンを作ろうとすると硬くなっちゃうんだけれど、言葉にとらわれないいろんなアクティビティを提案できたのが、全体として「自由」な雰囲気をつくりあげることにつながっていたと思います。

＊1　**教科「日本語」**　2007年度に世田谷区でつくられた独自教科。「深く考える児童・生徒の育成」「自分の考えや思いを表現することができ、コミュニケーション力を持つ児童・生徒の育成」「日本文化を大切にして、継承・発展させることのできる児童・生徒の育成」をねらいとしている。

＊2　**「子どもの権利条約」**　世界中すべての子どもたちが持つ人権（条約）として、1989年に国連で採択され1990年に発効。子どもが守られる対象であるだけでなく、権利をもつ主体であることを明確にした。子どもが大人と同じように、ひとりの人間としてもつ様々な権利を認めるとともに、成長の過程にあって保護や配慮が必要な子どもならではの権利も定めている。

＊3　**「むずかしいことをやさしく〜」**　劇作家井上ひさしの言葉。全文は「むずかしいことをやさしく　やさしいことをふかく　ふかいことをおもしろく　おもしろいことをまじめに　まじめなことをゆかいに　そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」。

＊4　**『世界の子ども権利かるた』**（合同出版、2022年）

＊5　**『ベルサイユのばら』**　池田理代子原作の同名マンガを宝塚歌劇団がミュージカル化した。1974年初演。フランス革命期の史実を基にしたフィクション。

参加した中学生にインタビュー2022

のの
（2022年度中学生演劇部参加者）

ののが世田谷パブリックシアター中学生演劇部に参加したのは2022年度だけれど、印象に残っていること、覚えていることってありますか？

「権利」って書いてあるシャンシャンを作ったこと！ これ何？ どこの場面でどうやって使うの？ って思いながら作っていたんだけど、作っている最中はとても楽しかった。劇のエンディングで使っていい感じになってよかった。

替え歌を作ったのも楽しかった。宝塚の『ベルサイユのばら』のテーマソング「愛あればこそ」を「権利あればこそ」って変えて。頭から離れなかったな。

2年前のことだから忘れてしまっている部分もあるけど、今でも区大会の時にもらった当日プログラムは大事にとってあるし、今でもたまにビデオ見たりしてる。

「子どもの権利条約」が劇のテーマだったけど、それまで「権利」について考える機会ってありましたか？

「権利」についてはそれまで考えたことはなかった。そもそも自分に権利があるってことも知らなかった。だから、あの時家で意味を調べたりしていたのを覚えてる。この劇をきっかけに知ることができてよかったと思ってる。

この前、友達から「うちの親がこんなこと言ったんだよ！」とか「顧問の先生からこんなこと言われたんだよ」とかいうのを聞いて、「あっ、それ権利侵害だよ！」って言ったことがあって。その友達に「それなんの権利？」って聞かれたから、「子どもの権利だよ」って答えた。ちょっと嬉しかった。侵害ってほどではないかもしれないけど、「？」って心の中でひっかかっているものは必ず誰でもあるから、やっぱり「権利」を知っといた方がいいなと思った。子どもが口出ししてはいけないって思うこともあるから、主張しづらいこともあるけど、子どもの権利条約を知ってから、誰かに何かを言われてモヤっとした気持ちのまま終わることが少なくなったと思う。私は、普段は強く主張するタイプではなくて。だから、結構周りからわーって言われちゃうこともあるんだけど、その時に今まではモヤっとしたままで終わってたんだよね。今でも言い返すことは少ないけど、自分の中で「それは自分じゃなくて相手の方が間違っている」って考えて、前向きに次のことに取り組めるようになったように思う。自分の中で意志確認できるようになったということかな。前は、誰かに何かを言われた時に、すぐに自分が悪いのかなって悩んでしまうことがあったんだけど、そういうときに一旦落ち着いて、正しいのはどっちだろうって考える基準ができたって言えるのかも。

ののは、今年は世田谷パブリックシアターの演劇部ではなく、自分の通っている中学校の演劇部員として区大会に出場して活躍していましたよね？ どうでした？

去年パブリックシアターでやっていた演劇づくりが、すごく自由だったから、学校の演劇でも同じように自由にやりたいなと思った。台本はあったけど、自分たちのオリジナルの劇にしたいねってなって、みんなで話し合って、台本に縛られるだけではなく、自分たちでアイデアを出していくことにした。台本は顧問の先生が書いてくれたんだけど、物語の骨組みは自分たちで話し合って決めた。先生が少しずつ書き進めてきてくれて、それをみんなで話し合って、その話し合ったことを先生にまた報告したりして、とにかくみんなでつくった。ともにゃみたいな進行役はいなかったから、部長である私がともにゃみたいなことをしていたのかも。

ののにとって、演劇の魅力とはなんですか？

演劇って、自分以外のいろんな人になれる。いろんな人になって、いろんな人の気持ちで物事を考えられるのがすごく楽しいなと思ってる。そこで感じたこと、考えたことが、今を生きている自分にも跳ね返ってきて、活かされている気がする。演劇の、「想像」できるとこが好き！

だから、演劇は続けたい。高校も演劇部のある学校を探してる。将来は演劇に関わりのある仕事がしたい。俳優もいいけど、友達のお母さんが舞台美術をやっていて楽しそうだから、舞台美術にも興味がある。でも、台本も書いてみたいかな。

とにかく、受験が終わったらまた劇場のワークショップに遊びに行きたい！ あの時のメンバー何人かを誘って。

創作プロセス 2022年度

～「レビューショー 私が私であるために ～子どもの権利条約より～」ができあがるまで～

「シャンシャン」
宝塚のフィナーレで、出演者全員が手にする小道具。今回の演劇部では、オリジナルの「権利シャンシャン」をつくりました。

8/27

知り合う／「マッチ売りの少女」をやってみる

まずは自己紹介からスタートし、いくつかゲームをやって、はじめましての人たちと距離を縮めた。その後、『マッチ売りの少女』の物語を劇にした。物語を3つのブロックに分けて、グループごとに1ブロックを担当し、シーンとして立ち上げた。振り返りでは、「はじめてで緊張したが、学校や学年が違ってものびのびと楽しむことができた」「もっといろんな作品を作ってみたい」という意欲的な感想が出た。

8/28

マッチ売りの少女を救済する劇をつくる／子どもの権利条約とは？

前日と同じく、ゲームからスタート。前日からの流れで、マッチ売りの少女が悲劇の結末を迎えるのではなく、少女自身が救済される劇を作った。思いもよらない方法で救済される話は、中学生ならではの想像力を感じさせられるものだった。その後、今回のテーマとして扱う予定の「子どもの権利条約」をみんなで声に出して読んでみた。そして、マッチ売りの少女の状況は「子どもの権利条約」のどの条項を侵害しているか、みんなで意見を出し合って検討した。権利が守られていればマッチ売りの少女は助かったのではないか、権利を知って行動していたらマッチ売りの少女はどう変われたのかなどを考え、「子どもの権利条約」にこれから取り組んでいくための一歩を踏み出した。次回までの宿題として、「子どもの権利条約」が作られることに貢献した「コルチャック先生」について各々調べてくることになった。

9/4

コルチャック先生の劇をつくる／ディスカッション／ダンスをつくる

宿題になっていた「コルチャック先生」について調べたことを共有した後、グループに分かれて印象に残った箇所について劇を作った。発表した後、「テレビ番組『情熱大陸』のような感じに作り変えて」という進行役ともにゃの指示のもと、コルチャック先生が言ったであろう名言などを想像で加えて、情熱大陸風のシーンに作り直した。後半はディスカッション。日常の中で理不尽だな、おかしいなど、違和感を感じることについて思い浮かんだことを出し合った。そして、みんなの話を聞いて印象に残った言葉や、その時に感じた感情などを紙に書き出し、それらを身体で表現してみることを試みた。最後は音楽にのせてダンスのような形にまとめてグループごとに発表。語られたエピソードの時に感じた印象、イメージ、怒りが力強く表現された。

9/18

『世界の子ども権利かるた』をやってみる

前回のディスカッションに続き、改めてこの演劇部に集うメンバーがどんなことを考えているかを知るために「Yes / Noゲーム」をやった。「親に言いたいけど言えないことがある？」「世界のニュースに胸を痛めることはある？」「ありのままの自分を受け入れられていると思う？」「自分と子どもの権利条約との距離感は近い？遠い？」など、いくつかの質問を投げかけ、Yes / Noで答えてもらい、その理由などを話し共有した。後半、『世界の子ども権利かるた』(権利条約が書かれた読札に対し、その条項に関わるエピソードが描かれた絵札で構成されたカルタ)を使ってみんなで遊んだ。そして、いくつかの絵札の内容をシーンに立ち上げた。最後に、今回の劇のテーマソングに、宝塚の『ベルサイユのばら』の主題歌「愛あればこそ」を採用することをともにゃが発表。原曲をみんなで歌って盛り上がり、この日は終了。

9/19

「こんな権利あったらいいな」を考える

前回の最後に歌った「愛あればこそ」の替え歌をみんなで作り、練習。作り替えた歌のタイトルは「権利あればこそ」。多いに盛り上がった。その後、前回に続いて、参加しているメンバーが日頃どのようなことを考え、思っているかを知るため、様々なお題でディベートを試みた。続いて、みんなにどんな権利があったらいいかをたずね、「あったらいいな権利」を思いつくままにあげてもらった。「子どもでも働ける権利」「自分のものは自分のものと主張できる権利」など、とても興味深い権利が出てきた。その中から自分が気に入った権利を選び、ワンモーションで表現し、みんなの動きをつなぎ合せてダンスを作った。最後に、これまでワークショップでやってきたことを振り返り、その中で本番の舞台にのせたいことをみんなから挙げてもらい、劇全体の構成について話した。

9/25

シーンの練習

今回の劇を「レビュー」という形式で構成したいと考えていることや、みんなの意見をもとに考えた構成案についてともにゃが説明。これまでに作ってきたシーンのいくつかを、配役を入れ替えたりしながら作り直した。最後に、前回考えてもらった「あったらいいな権利」について、改めてなぜその権利があったらいいのかを説明してもらい、みんなで共有した。

10/1

劇の構成を考える

みんなで劇の構成について再検討。

この劇の中で取り扱いたい権利、みんなにとってどの権利が大事だと思っているのかなどを改めて話し合い、いくつかに絞った。そして、その権利が登場するシーンをグループごとに立ち上げた。後半は、ダンスの練習。話し合いやシーン作りで頭がいっぱいいっぱいになったところでのダンスタイムだったので、みんなのエネルギーが思いっきり発散され、盛り上がった。

10/2

はじめての通し

前回作ったシーンの練り直し。その後、みんなで車座になって「私にとって権利とは?」というお題で話し合った。「強い人から弱い人を守るもの」「責任が伴うもの」「生きやすくなるためのもの」「自分を守るために生まれたもの」など、様々な意見が上がった。後半は、ここまでにできあがったシーンをつなぎ合せ、はじめて通してみた。手応えを感じつつ、自分が思っていること、考えていることが伝えきれていないのではないかといった意見も出たりして、今後に向けた課題が見えてきた。

10/9、10、16、22、23

シーンのブラッシュアップ

配役を発表。みんな何役もやることを確認。その後、どうしたら初めてみる観客にわかりやすく伝わるのかを意識しながら、ともにゃやスタッフからのアドバイスをもとに作り直した。劇のラストについてはギリギリまで検討。ラストは、権利について考えたことを手紙形式の文章で3人の中学生に読み上げてもらうことになった。また全員が「私にとって権利とは?」というお題の答えを一人ひとり客席に向かって呼びかけることになり、みんな納得した様子だった。この期間、ワークショップ終了後の時間を使って、フィナーレで使う「シャンシャン」をみんなで製作。自ずと本番へのテンションが高まっていった。

10/29、30

リハーサル、本番

29日は本番の会場で照明、音響のチェックをしながら場当たり。30日、本番当日。一人一人自信をもって堂々と舞台に立ち、自分たちがこの劇を通して観客に何を伝えたいのかを明確に意識しながら演じることができたようだ。また終演後、これで終わってしまうことへの名残惜しさと共に、やりきったことへの誇らし気な表情をみることができた。

11/13

ふりかえり

みんなでジェスチャーゲームをして遊んだ後、本番の映像鑑賞。このワークショップを体験して、また子どもの権利条約を知ることで、自分の中で変わったことなどを率直に話していた。また、もっとやりたい、もっと考えたい、もっと話したいという思いでウズウズしている様子が印象的だった。

2023年度

中学生演劇部「ミュージカル桃二郎」をふりかえる

2023年度の中学生演劇部(2期)は、
「ミュージカル　桃二郎」を区大会で上演しました。
この物語は、桃太郎の生まれ変わりの
「桃二郎」というオリジナルのキャラクターが、
鬼退治ではなく、鬼と対話して問題の解決を目指すというものです。
「村を襲った鬼にも事情があったのではないか」と
子どもたち自身が想像しながら、
全13回のワークショップで編み上げて行きました。
今回は、昨年に引き続き進行役を務めた大道朋奈さんと、
アシスタントとして中学生たちと演劇作りに取り組んだ
伊藤恭平さん・高野栞さんとともに、
ワークショップのことや作品のことを振り返りました。

大道朋奈(ともにゃ) & 伊藤恭平(へーちゃん) &
高野 栞(しおりん) & 学芸

ワークショップで目指していたこと

学芸　大道さんには、2022年度に引き続き2023年度も「中学生演劇部（2期）」の進行役をお願いしました。2年連続でやってみてどうでしたか？

大道　昨年のワークショップを進行して印象的だったのは、集まってくれた中学生がみんな、相手を思いやる、気遣いができる子どもたちだったってことですね。それぞれ違う学校から、劇場に集まっているからかもしれないけれど。話していると、それぞれ学校とか友達に対して、言えないことや不満をもってはいる。劇場ではそういうことも少し話してくれるんです。でも、普段、学校にいる時は、そんな風に思っていることは心に隠して、そつなくやっているのかなって感じました。
学校とかクラスとか、同じコミュニティの中にずっといると、競争や対立が生まれますよね。それが苦しいことってあると思うんです。だから、「対立」をテーマに、隠しているエネルギーや苦しさを出す機会があってもいいのかなと思いました。演劇を通じてなら、対立も面白がれると思いましたし。普段は言えていない言いたいことを言える場所を、ワークショップでは作りたいと思っていました。

学芸　決まったコミュニティ内だと難しいことも、劇場という非日常な場所だから共有可能なこともありますね。

伊藤　中学生くらいだと周りの人から期待されることも増えますよね。勉強でも、クラス運営でも、部活でも。高校、大学、その後…と先を見据えた行動を期待される。自分はその期待とは戦わなかったです。従ってきた。今回のワークショップは、子どもたちがそういう期待から離れて、自分のやりたいことをやれているように感じました。やりたいことをただやれる場所ってあんまりないですよ。そういう場所に、このワークショップはなっていたと思います。

学芸　やっていて大変だったことは何かありますか？

大道　子どもたち一人一人のモチベーションの違いをどうするかは悩んでいましたね。ワークショップ自体を楽しみたい子も、発表を頑張りたい子もいる。楽しんでほしいけれど、作品も完成させなきゃいけない。なにより、本番が1回しかない中で、終わったあとに本人が後悔することになって欲しくないし。けれど、それぞれのペースに合わせたいのもあるし。

伊藤　たしかに自分自身も、足並み揃えようとしすぎないように気をつけていたかもしれないです。頑張ろう！ もうすぐ本番だぞ！ ってハッパをかけない大人が、1人くらいいてもいいかなって思って（笑）。

学芸　振り返ると、大人も中学生もいろんなタイプの人がいて、良いバランスでした。スタッフは5人いたので、進行役は全体を進行するけれど、自分のペースで進みたい子どもには他の大人が目を配ることができました。中学生くらいの参加者にとって、立場も考えも違う大人が複数いるのは良かったように思います。

子どものいろんな面が見えた「演劇づくり」と「余白の時間」

伊藤　衣装を作った日は楽しかったです。劇作りでは積極的にはみえない子も、衣装作りになったら、こだわりとか、情熱みたいなものが見えて。違う一面が見えるのは、そういう余白の時間だったりしますよね。

大道　子どもの違う側面は演劇づくりのプロセスでも、見える瞬間がありました。口数が少ない子でも、劇中では、引っ張ってくれたりして。そうやって、お互いにいろんな面を見せあいながら、みんなでつくっていけたと思います。振り返りの日には、「それぞれの良さが出ていたのが良かった」と言っている人が何人かいました。うまく出来なかったって落ち込んでいる子にも、「そこも素敵だよ」って声をかけあっていて。みんながそれぞれ自分らしくいられたうえで、いろんな人がいることが、表現の強さに繋がったと、参加者も実感してくれたのかなと思いました。

学芸　それぞれの持っているものを活かせるような場を中学生自身がつくっていましたね。

高野　これまで何度も参加してくれているような経験のある子でも、ぐいぐい引っ張るというよりは、みんなを待って、みんなでやろうって。

学芸　あと振り返りの日に、「自分の中学校に演劇部を作りたいと思って、先生に相談した」と教えてくれた子がいたのも嬉しかったですね。

大道　劇場のワークショップが「学校に演劇部を作りたい」と思うきっかけになったとしたら嬉しいことですよね。だけど、思ってもなかなか行動できないものだから、実際に「部活をつくりたい！」と行動したのは、その子のすごさだと思います。

「お悩み」から「対立」を考える

学芸　2023年度は「対立」をテーマに作品作りが始まったわけですが、そうは言っても「対立」ということ自体が、今の中学生の日常にとってリアリティが感じられないのではないかという懸念はありましたよね。無意識に避けているでしょうから。

大道　だから、導入としては「お悩み」というキーワードを設定しました。悩みであれば、大なり小なり誰でもあるでしょうし、言える範囲で言ってもらえばいいと思ったので。「お小遣いが少ない」とか、兄弟関係のこととか、等身大のエピソードを屈託なく話してくれました。

学芸　一人一人の悩みを聞いてみると、その悩みのエピソードには必ず他者が関わっている。親だったり、友達だったり、もう1人の自分だったり。悩みを紐解いてみることで「対立」関係が見えてくる。「対立」というものが、必ずしもニュースになるような戦争とか大きなものじゃなくて、「お悩み」という自分たちの身近なところに存在することを知ってもらうことから始めましたね。

大道　「お悩み」についても段階的に取り組みました。はじめは桃太郎の悩みとか、縄文人の悩みとか、非日常の人物の悩みをゲーム形式で取り組み、そのあと中学生自身の悩みを話しあったりして。そして、実際に作品を作っていく段階では、登場人物である鬼、村人の悩みをそれぞれ考えることで、鬼と村人の対立について考えていきました。

学芸　そこで生まれたのが「村人の悩みソング」と「鬼の悩みソング」でしたね。

大道　歌詞を考えるのに時間をかけましたよね。どちらの立場の歌詞も、全員で考えられたのがよかったです。最終的にはどちらも辛さを訴える内容の歌詞になっていました。村人も鬼もどちらも苦しいんだってことをみん

なで発見した。フィナーレの歌詞を作った時は、とってもハッピーな雰囲気で、歌詞が出来たらみんな勝手に口ずさんでいて、可愛かったな。

傷つけあわずに
対話から解決したい中学生たち

学芸　はじめ、中学生たちが、鬼と村人の対立を、鬼退治という形ではなく、鬼対話という形で傷つけ合わずに解決したいって言っていたことに関しては、どう思いましたか？

大道　中学生たちも、対立を話し合いで解決する難しさは感じていたと思います。実際に鬼対話のシーンには時間がかかっていましたしね。ですが、「話し合いで、傷つけずに解決できる」ことを信じられるギリギリの年齢なのかなとも思いました。大人だと、そのことの難しさを実感しすぎてしまって諦めてしまうでしょうから。

伊藤　仲良くするための努力を中学生たちは諦めなかったですよね。鬼にだって事情があることを疑っていなかったと思う。

学芸　と同時に、「ごめんね」といえば解決するほど簡単な問題ではないことも、分かっていた。あと、劇をつくる上で解決のシーンをみんなで考えるためには、争点を明確にする必要があるわけですが、そのプロセスは難しそうでしたよね。対立ポイント、いわば相手への文句・意見を明言することが辛かったのかもしれません。誰かに先んじて意見を言うのが難しいっていうのもあるのかもしれないけれど。

大道　最初に表明された意見の方が強くなりがちで、後からは意見を言いにくくなるところもありますしね。

学芸　でも相手役への意見や文句をいうことは難しくても、相手の話を聞くことはできてはいましたよね。

伊藤　とはいえ、自分の意見を言うことは大事ですよね。相手の言うことを聞くのも大事だけれど、自分も伝えたいことを伝えて、はじめて対話は可能になる。今回は、聞くのが得意な子が多いように見えたけど、伝えるのが得意そうな子もいて、どっちも大事だって感じてくれていたらいいなと思います。

大道　対話は、大人の私にとっても難しい課題です。だから、みんなで考えたいと思ったんです。中学生も、対話の難しさや、複雑さは普段から感じていたのかなと、ワークショップでの取り組み方を見ていて思いました。

学芸　でも、同時にその難しさを突き抜けて、フィナーレの曲を歌えてしまうのが中学生の強さだなとも感じました。難しさもわかっているけど、それでも、できる！ っていう強さ。平和を歌い上げても、嘘くさくならない。それは、中学生ならではかも。

高野　この演劇づくりを経て、中学生たちは何を得たのだろうとずっと考えていたんですが、困難な対話が起こった場合のノウハウとか、今後はもう対立が起こっても大丈夫！というような単純な答えじゃないんだろうなと思いました。これからの人生で何かにぶつかって苦しい時、ふと「誰かの話を聞いてみよう」とか、「ちょっとご飯を食べてみよう」とか、「歌ってみてもいいかも」とか思えるような気持ちが、どこか心の片隅に残ったのではないかなと思います。

大道　簡単なことではないですよね。大人になっても、諦めないで対話していきたいですね。

参加した中学生にインタビュー2023

まり
（2023年度中学生演劇部参加者）

このワークショップに参加しようと思ったきっかけは？

通っていた小学校に世田谷パブリックシアターの人が来て、授業の中でワークショップをやってくれた。1年生の時だったかな。1学期にワークショップがあって、そのあとすぐに夏休みのワークショップのチラシが学校で配られて、それで初めて劇場でやっているワークショップに参加したんだよね。小1、4、6年の時に参加したと思う。そこで、既にともにゃには出会ってたんだよね。4年生の時にプレーパークでやってた劇団そらに入って、そこで沼った。ずっと続けていたんだけど、コロナで活動休止になっちゃって。中学に入って世田谷パブリックシアターに参加するぞって思ったんだけど、去年は申し込みそびれちゃったんだよね。だから今年こそは！ と思って申し込んだ。

演劇のどんなところが好き？

もともと絵を描いたり、ダンスしたりするのが好き。たぶん何かを「つくる」のが好きなんだと思う。ゼロから作るのも好きだし、元からあるものを自分の中にインプットして分解したりしてつくりなおすのも好き。演劇は、言葉と身体両方とも使うのがおもしろいところだと思う。セリフと動きを両方やらなきゃいけないのが、大変だけどおもしろい。あと、長々と時間をかけてつくることの達成感を味わえるのが演劇だと思う。自分の場合、絵だとすぐに描き終わっちゃうんだよね。だから、じっくり時間をかけてつくりあげた時に達成感を感じられる、演劇のあの感じが楽しいんだと思う。

今回の劇「桃二郎」では、まりはゾウの役をやったよね。人の話を聞くこと、傾聴することの大切を伝えるのに重要な役割だったと思うのだけど、役作りはどうやって考えたの？ ほわわんとした感じの喋り方とかすごく工夫していたよね。

あの感じは、進行役アシスタントのしおりんが提案してくれたんだ。はじめ、桃二郎のお供になるキャラクターをみんなであれやこれや考えていた時、私、羊役をやってみたんだよね。あの時のイメージをゾウにもうつしてみたって感じだから、わりと早めにイメージは固められたんだよね。あと、私、お話作りとかが好きで。特に設定を練るのが好き。キャラの設定とか考えるのがすごく好きなんだよね。だからすぐにできちゃったのかも。

一番楽しかったのは？

中間発表の日かな。本番直前のリハーサルも盛り上がったけど、はじめて劇の全体像や形が見えてきた時、みんなで「すごーい」ってなった。中間発表に向けて頑張ろうって、みんなも思っていたしね。あと、ワークショップの時間外にはなるけど、ワークショップの始まる前とか、終わった後にやっていた衣装づくりとか、帰り道とかも楽しかったな。みんなとおしゃべりして。

まりはこの先、演劇は続けるの？

劇を続けるかもしれないし、わかんない。やりたいことがいっぱいありすぎる。でも、最近分かったことは、自分、絵を描くのは向いてないってこと。図形認識が苦手らしいんだよね。2Dはいけるけど、3Dが無理。でも、デザイナーはなれなくても服を作ることはできるかなと思ったり。あと、文章を書く仕事とか、話したりする仕事の方がいいのかなとか、やりたいこと、自分にできること、いろいろ考えてる。だから、劇を続けるかは、うーん、わからない。

でも、高校に演劇部があったら入ろうかなとは思う。でも、滑舌とか、ラジオ体操とか、筋トレとかを毎日バリバリやるような演劇部はきついな。体力的にも精神的にも。一体感とか、連帯感とか、いい時はいいんだけど、ちょっと苦手なんだよね。その点、今回の演劇部は、いろんなキャラの人たちがいて、やりたい人はやるし、やりたくない人はやらないみたいな感じで、それぞれが自由なスタンスでいられるのが、不登校経験のある自分にはすごくいやすかった。いろんな学校の子たちが集まってくる今回みたいな演劇部の方が私には向いていたと思う。いい意味でその場かぎりの仲間だっていうのが、自分にはよかったんだと思う。

創作プロセス
2023年度

～ミュージカル「桃二郎」ができあがるまで～

8/27

知り合う

夏休みのワークショップなどで既に顔を合わせたことのある人もいれば、はじめましての人たちも。まずは自己紹介からスタート。その後、いくつかゲームをやり、この日の最後は「昔話の登場人物にもし悩みがあったらどんな悩みか」を考え、シーン作りに取り組んだ。「学校以外の子に会う機会があまりないから新鮮だった」「不安だったけどみんなで楽しく過ごせてよかった」「これからが楽しみ」など、10月末の本番に向けて活気のあるスタートを切った。

9/3

「夏」をテーマに創作

はじめにいくつかゲームをやってウォーミングアップ。この日のテーマは「夏」。グループごとに「ひとだま音頭」の振り付けに挑戦。そのあと、「夏といえば」「夏の食べ物」「夏の悩み事」と聞いて思い浮かぶ単語をたくさん列挙するゲームをやり、夏に対するイメージを膨らませた。メインのワークは、夏についての川柳を作り、その川柳を取り入れた劇の創作。既存の台本を使わなくても、自分たちの身の周りに目を向ければオリジナルの劇を作ることができることを体験してもらった。

9/9

「悩み」について話す／劇にする

ウォーミングアップのゲーム後、進行役のともにゃから区大会についての説明。今回は「レビューショーお悩み」という設定で劇を構成していくことを提案。まずは一人一人が考えていることをより深く知るために、ディベートをやってみた。後半は、自分たちのことから少し離れ、いろいろな立場の人の「悩み」を考えてみようということで、「桃太郎の悩み」「校長先生の悩み」「1億円当たった人の悩み」「縄文人の悩み」について考えるワークをやった。そして、2グループにわかれて「一億円当たった人の悩み」と「縄文時代の人の悩み」をシーンにした。

9/10

みんなの「悩み」を語る／「桃太郎」の鬼の悩みを考える

参加者一人一人日々どんなことを考えているか、どんな悩みを抱えているかについて車座になって話し合った。「お小遣いが少ない」「兄弟がうざい」「勉強が面倒くさい」など、等身大の悩み、思いが次々と出てきた。その後、ともにゃが『桃太郎』をベースに作品を作ることをみんなに提案。『桃太郎』に出てくる鬼たちが悩みを持っているとしたら、どんな悩みかを考え、一人一人鬼になりきって、鬼としての悩みを語るワークをやった。

9/17

劇の構成を提案／話し合い

みんながこれまでやってきたことをもとに、ともにゃが劇の構成を考え、みんなに提案。仮のタイトルは『桃二郎』。桃太郎が鬼ヶ島でうっかり死んでしまい、二周目の人生を「桃二郎」としてやり直す中で、お供の動物たちとの出会いを通して「対話」の重要さに気づき、暴力を使わない形で鬼と向き合い、和解するための「対話」を試みようとする物語。物語の設定は、9/9にみんながつくった、桃太郎の死後、神様会議が開かれるシーンから着想を得た。間に歌やダンスのシーンも入れ込み、ミュージカル仕立てにしたいことも説明。中学生たちは少し驚きながらも、「いいねー」「やろうやろう」とやる気十分な様子だった。この日は、鬼たちの悩み、苦しみを訴える歌の歌詞を創作。その後、「『桃太郎』の話の中で鬼と人間が対立するようにみんなも誰かと対立した経験はあるか？またそういった時、どうするか？」という問いのもと、みんなで車座になって話し合った。

9/18

シーンづくり

前日に作った鬼の歌と同じように、村人の歌も創作。その後、桃二郎に付き従う動物たちを猿、犬、雉ではないオリジナルの動物にすることをともにゃから提案。前回「対立」についてみんなで話し合った時に出てきた「対話」の重要さ、「対話」のために必要なことを劇を通して伝えるために、それぞれの動物に「対話」のために必要な要素である「聞く」「和やかにする／もてなす」「意見を言う」という役割を持たせることになった。そして、どんな動物がいいかみんなでアイデアを出し合った。話し合った結果として、「聞く」力のあるゾウ、「和やかにする／もてなす」力のあるクマ、「意見を言う」力のあるキツツキという３匹の動物が決定。それぞれの動物たちがそれぞれの能力を発揮する場面を創作し、その場面を見た桃二郎が動物たちをお供にしていくシーンを作った。他にも桃二郎がすくすく育っていく場面など、いくつかシーンを立ち上げていった。

9/30

シーンづくり／歌・ダンスの練習

前回の続きとして、お供の動物たちが活躍する場面を創作。後半は、桃が川から流れてくる場面など、いくつかのシーンを作った。そして、この日の最後は劇のラストで登場する歌とダンスをみんなで練習。シーン作りで頭がパンパンになっていたタイミングでの歌とダンスの練習だったので、みんな解放されたように楽しんでいたのが印象的だった。

10/1

配役発表／シーンの練習

ウォーミングアップを兼ねて、歌とダンスの練習からスタート。これまでは役は固定しないでシーンを作っていたのだが、全体のバランス、出はけのことを考慮して、ともにゃが考えた配役を発表。みんな自分がどの場面に出るのか入念にチェックした上で、シーンとシーンをつなげてやってみる練習に取り組んだ。

10/9

はじめて通してみる

歌とダンスの練習からスタート。シーンごとに確認してから、劇のはじめから終わりまで通してみた。通しが無事に終わると、みんなから歓声が上がった。思っていた以上によくできた

という感触を得られた様子。達成感を感じたところでこの日は終了。

10/14、15、21、22

練習

一つ一つのシーンの精度を上げていくために、繰り返し練習。シーンをつなげてやってみて気づいたことをもとに、修正を加えていく作業を積み重ねていった。また、衣装作りも中学生たち自身で取り組み、ワイワイガヤガヤ盛り上がった。練習でもっとも苦労したのが、鬼と村人が桃二郎たちを介して対話する場面。対話に必要な要素を担うお供の動物たちが鬼と村人の間に入って対話を促していくのだが、なかなか思うように進まず。形としてはできているのだが、思い、熱量、勢いみたいなものが足りず、場面が動いていかない。そのことに中学生たち自身も気づき、必死になって何度か繰り返していくうちに、「これだ！」と何かを掴む瞬間が訪れ、「いける！」という感触を持ってリハーサルに向かった。

10/28、29

リハーサル／本番

28日は、本番の会場で照明、音響のチェックをしながら場当たり。初めての会場でドキドキしながも、次の日の本番に向けてみんなの気持ちが高揚していた。
29日本番当日。大会2日目のトップバッター。もちろん緊張もあっただろうが、1回しかない本番の時間を体中で楽しんでいた様子。やりきった表情がとても爽やかだった。

11/12

ふりかえり

久々に集合。まるで遠い昔のことのように、みんなあっけらかんとした様子。やりきった、力を出しきったからだろう。本番の映像を鑑賞した後、一人一人この演劇部に参加してみて思ったことなどを語った。「家族がとても面白かったと言ってくれた」「他の学校の友達ができてよかった」「自分の学校に演劇部を作りたい」など、それぞれの感想を共有し、終了した。

参加した中学生にインタビュー 2022/2023

もっちィー
（2022年度・2023年度中学生演劇部参加者）

2022年度のテーマは、「子どもの権利条約」でした。「子どもの権利条約」と聞いてどう思いましたか？

存在は知っていた。世間でSDGsとか言われている中で聞いたことはあった。具体的に何かは知らなかったけど。でも、私は人権に関することにずっと興味があったから、正直「ヨッシャー！」って思った。今まで生きてきて、権利があるのにそれを制御されてるって思うことが色々あった。それに、小さい頃から上から押しつけられることに対して抗うっていう性格だった。だから、子どもの権利条約の紙を配られた時、これを演劇でやるんだってワクワクしたね。他の子はキョトンとしてたけど。

ワークショップのはじめの方で、参加者が一列に並んで子どもの権利条約を読んだことあったでしょ。あれは迫力あってすごく印象的だった。

実際に「子どもの権利条約」を演劇として取り組んでみてどうでした？

権利条約っていうと、すごく大きなことなのかなと思ってた。戦争で苦しんでるとか、虐待を受けてるとか、お腹を満たせないとか、そういう自分が経験したことのない、距離のあることだと思ってた。でも、演劇をやってから、普段の生活に戻った時、前よりも小さなことに目が向くようになった気がする。権利を守るっていうのは、大きい国連とかがやっていることじゃなくて、学校とか家とかで自由に発言できるとか、表現できるとか、そういう小さいことが子どもの権利を守るってことなんだなって思うようになった。自分たちにとても身近な問題なんだって。

そうそう、みんなで替え歌作ったよね。『ベルサイユのばら』の「愛あればこそ」を「権利あればこそ」に替えて。あの歌本当に最高！「権利ゆえに私は私〜♪」って、この世の真理だよね！ 今でも家で歌ってるよ。

みんなで自分たちの経験とかいろいろ話し合いましたよね？

あんなに話し合うこと自体、普段の生活ではあまりしたことがなかった。話し合う前に約束事を確認したよね。「ここで話したことは外で言わない」とか。あれがとても良かった。あの場がとても居心地良かった。みんなが自分を解放して話しているように感じた。普段は全然知らない子たち同士っていうのが良かったのかもしれない。日常の知り合いがいないことで匿名性みたいなものが生まれて、それで安心できたのかも。

2年連続で中学生演劇部に参加していたからか、昨年は特にみんなのことを支えてくれていましたよね？

2年前の中学生演劇部に続いて、「地域の物語」（中学生に限らず、誰でも参加できる劇場のプログラム）に参加したんだよね。その時にも、すごく安心感、居心地の良さに包まれたから、こういう場を私が作りたい！ 作らねば！ って思った。自由に意見を言ったり、話を受けとめられるような場、雰囲気を作るのがすごく大事だって思ったの。でも、1人だけがそう思っているだけでは無理で、全員がそう思っていないと作れない。だから、そのためにやれることをやっていっただけ。結局は自分のためだから。

「桃二郎」の時もいっぱいみんなで話し合ったりしましたよね。大変なこととかありましたか？

鬼対話のシーンが大変だった。鬼と村人が仲直りするっていう結末は決まってたんだけど、どうすればそうなれるのか、本当に悩んだ。難しかった。でも最終的には、鬼と村人それぞれの問題、課題を出していって、一つ一つ解決していったのは良かったよね。どんなことでも一気に解決するとかってあり得なくて、一つ一つ解決していくしかない。あと、歌って踊るのは大変だったね。2年前も踊ってたけど、今度は歌って踊るの？ って。でも、意外といけてなんとかなってよかった。

もっちィーにとって演劇はどういう存在ですか？

私は歌がすごく好きで、去年の8月から声楽を習ってる。この前はコンクールにも出場して、駅前ライブにも挑戦した。音楽をメインに頑張っていきたいって思ってる。そういう意味では、演劇はサブかもしれない。でも、演劇は私の中で大きい存在であることに変わりなくて。表現活動っていう意味では歌も演劇も同じだから、全てはつながっていると思ってる。これからも世田谷のワークショップに参加したい。

世界を変える、意思表明としての演劇

～世田谷パブリックシアター中学生演劇部の作品をふりかえる

滝口 健（世田谷パブリックシアター劇場部マネージャー）

世田谷区では、毎年秋に世田谷区立中学校の演劇部が日頃の活動成果を発表する、世田谷区立中学校演劇発表会（以下「区大会」）を開催しています。その区大会で、世田谷パブリックシアターは、主催者である世田谷区教育委員会、世田谷区立中学校校長会、世田谷区立中学校教区研究会演劇教育研究部（以下「世中研」）と緊密に連携し、舞台技術の支援を含むさまざまなお手伝いをしています。また、区内に29校ある区立中学校のうち、演劇部があるのは8校だけのため、演劇部のない中学校の生徒も演劇部の活動をできるように、世中研の先生がたともご相談し、「世田谷パブリックシアター中学生演劇部」を2013年度より設けました。そのため、世田谷パブリックシアター中学生演劇部は、この区大会に毎年参加し、他の区立中学校演劇部の皆さんの作品と並んで発表をおこなっています。

発表会には演劇の専門家が講師として招かれ、作品の講評を差し上げたり、都大会に進出する作品を選出したりすることになっています。私も世田谷区の劇場のスタッフとして講師を任され、2021年度から区大会で発表されるすべての作品を拝見し、講評を差し上げる機会をいただいてきました。世田谷の区大会で特徴的なのは、既存の台本をそのまま使う学校が比較的少なく、顧問の先生や外部指導員が潤色をおこなったり、新しい台本を作ったりする例が多く見られることです。

その中でも、世田谷パブリックシアター中学生演劇部の作品は、出演者たちがワークショップを重ねて作品を作り上げていく集団創造の方法を大きな特徴としています。集団創造の方法は、東南アジアで演劇を作ってきた経験のある私には、実は非常に馴染み深い方法です。舞台上で演じる俳優たちは、自らが喋る台詞の作者でもあります。その結果、「この台詞は自分のものである」という強いオーナーシップ（所有の感覚）が生まれてくることになります。それは舞台を見る我々観客にもはっきりと分かるはずです。

実際、今回の『CarroMag』で取り上げられている2022年の『レビューショー 私が私であるために～子どもの権利条約より～』も、『ミュージカル 桃二郎』も、それぞれの参加者の声がダイレクトに観客に迫ってくる感覚がありました。『私が私であるために』では、劇の中で「自分自身」として語るパートが挿入されていることもあり、台詞のオーナーシップが際立って明確に表現されているように思いました。子どもの権利条約という、自分たちにとっても直接かかわりがある（かもしれない）題材を扱ったことも、自分に引き付けて自分の言葉で語るというモチベーションを高めることになったのではないでしょうか。テーマソングである「権利あればこそ」を全員が朗々と歌い上げるクライマックスのシーンは、思わず背筋を伸ばして聞き入ったほどの迫力がありました。

一方、『桃二郎』は昔話の「桃太郎」をベースにしていることから、「物語を語り、役を演じる」という側面の印象が強くなっていました。架空の世界の中で、時には人間ではないキャラクターを演じながら物語を紡いでいくという作業は、もしかすると「普通の」演劇により近いものなのかもしれません。ただ、私がこの作品を見ていて一番印象に残ったのは、「聞く」ことへの意識でした。中学生の発表を拝見していると、ともすれば自分の台詞だけに集中してしまい、周りの俳優が話していることへの意識が薄くなっていると感じることがあります。『桃二郎』では、そういったことがほとんど感じられなかったのです。もしかすると、「自分が台詞に対して感じているオーナーシップを、今目の前で話している人も自分の台詞に対して感じているはずだ」という意識が、相手の台詞を大事に思い、それを丁寧に聞くことにつながっているのかもしれません。

そして、私が二つの作品に共通して感じたのは「この世界を変えていくのは自分たちだ」という強い意志でした。「おかしいと思うことに対しては声をあげていいのだ、あげるべきなのだ」という認識、そして「誰かにお願いするのではなく、自分たちの行動によって変化を起こすのだ」という意識は明確でした。非常に興味深かったのは、そうした力強い意志が、時には激しい身体の動きとして表現され、時にはほんわかした会話の中から立ち現れてきたということです。世田谷パブリックシアター中学生演劇部の作品の中で、しなやかに、軽やかに身振りを変えつつ提示される様々なシーンを見ながら、変化を求める方法は様々な形をとってよいのだということを、私は学ぶことができました。演劇の実践を通じて社会の変革を呼び掛けた『被抑圧者の演劇』で知られるアウグスト・ボアールは「演劇は革命のリハーサルであるべきだ」と唱えましたが、私が目にしたのは、そうした「革命のリハーサル」の最新の形なのかもしれません。

世田谷パブリックシアター中学校演劇部の作品は、他の作品の中に並んだ時、参加者たちがゼロから生み出した言葉で構成されたやや異質なものに感じられるかもしれません。台本がまず存在し、それをどのように演劇作品として具体化していくかを考えて作り上げられた作品と、集団創造のプロセスから生み出された作品の印象が異なることは自然なことだからです。ただ、台詞を自分のものとして引き受けること、相手の台詞を尊重してきちんと聞くことの重要性はどんな演劇であっても変わりはないはずです。また、中学生たちの「自分たちがこの世界を変えていくのだ」という力強いメッセージは、形は違えど区大会で上演された多くの作品から感じることができるものでした。世田谷パブリックシアター中学校演劇部と世田谷区内の中学校演劇部とがともに影響しあい、さらに素晴らしい表現が生まれていくことを願ってやみません。

CarroMag. お知らせ MAR.2024

2024年度
世田谷パブリックシアター
学芸事業

子ども対象

あかちゃんから小学生、中学生、高校生まで、子どもたちが演劇やダンスなどの舞台芸術と出会い、見て、感じて、楽しみながら参加できるワークショップを行っています。

- **子どもごちゃまぜワークショップ**［毎月開催］
- **世田谷パブリックシアター中学生演劇部 1～3学期ワークショップ**［6月、9～10月、2025年3月］
- **せたがやこどもプロジェクト2024**［7～8月］
- **春休みこどもワークショップ**［3月］

区民参加

毎月開催している「デイ・イン・ザ・シアター」から3ヶ月にわたる「地域の物語」といった演劇ワークショップ、三茶の街を舞台に行うフェスティバルまで、いろんなかたちで劇場や街を体験できます。

- **デイ・イン・ザ・シアター**［毎月開催］
- **『フリーステージ2024』**［4月28日～5月6日］
- **世田谷パブリックシアターダンス食堂**［9月ほか］
- **世田谷アートタウン2024『三茶de大道芸』**［10月］
- **『地域の物語2025』ワークショップ**［未定］

地域連携

世田谷区立小・中学校や区内の非営利組織や団体、社会福祉法人等と連携して、地域社会の抱える課題解決に向けたさまざまな演劇の実践を行っています。
＊連携パートナー経由でご参加いただけます。

- **かなりゴキゲンなワークショップ巡回団**［5月～2025年3月］
- **下馬地区アートプロジェクト**（極楽フェス2024）［12月］
- **移動劇場あっとホーム公演『チャチャチャのチャーリー ～あなたとチャチャチャ～』**［5～6月］

専門家育成

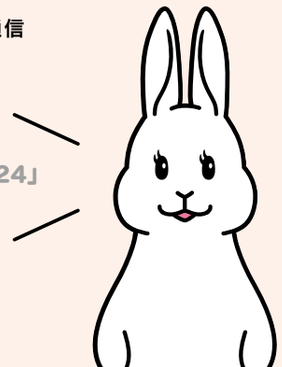
舞台芸術に関わる専門家育成の場として、演劇ワークショップの進行役、研究者、大学生らを対象にしたプログラムを実施しています。

- **演劇ワークショップラボ2024**［4月～2025年3月］
- **インターンシップ**［7～8月］
- **舞台技術講座**［8月、2025年4月］

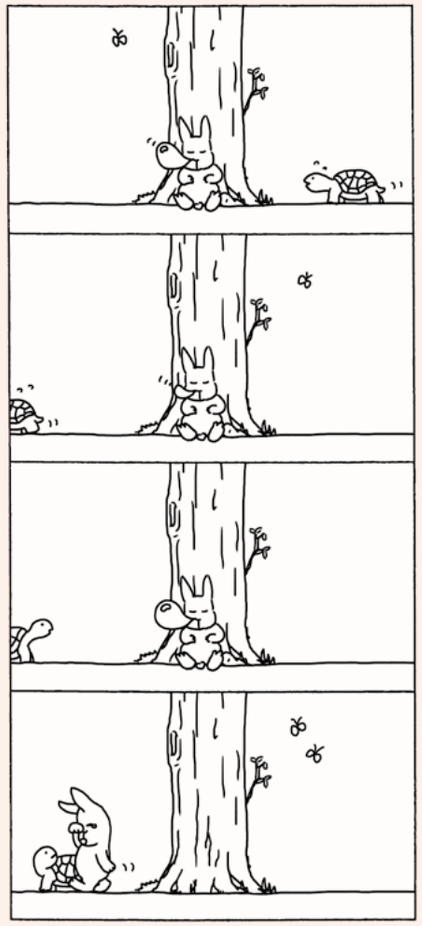
刊行物

- **キャロマグ**
- **学芸プログラム通信**

夏には、
「せたがやアートファーム2024」
があるよ。



たまにはこんな役 #20



編集後記

- 2024年新年、これからは1年に1回行ったことのない国に行こうと決意し、とりあえずインドに行ってみました。とっても寒くて風邪をひきました。いろいろなトラップをさまざまな人に仕掛けられました。次回はもうちょっと対処できるかも。もう一度行ってみたい国でした。（え）
- 近所に猫がいます。名前はヌト。太々しい様が魅力的な猫です。先日、ベランダの洗濯機を開けたら中からヌトが現れました。よくも昼寝を邪魔したな、と言いたげに睨みを聞かせ去っていく後姿は、何とも言えぬ趣がありました。イヌ派でしたが、猫も素敵と思うこの頃です。（し）
- 子どもの来年度就学にむけてラン活（ランドセルを探す活動）をしています。たかがランドセル、されどランドセル。子どもの気持ち、親の気持ち、子どもの夢、親の現実、子どもの今、親の経験…。つくづく、自分の「育児」のあり方が問われるイベントだなと感じています。（く）
- ベランダで花を育てています。ヴィオラ、パンジー、金魚草はモリモリ花を咲かせ今が盛りと大賑わい。そんな中、1年半前に芽を出したクリスマスローズは、背丈15cmでまだ緑の葉っぱのみ。ジワジワゆっくり成長中。花が咲くまであと1年半かかるとか。ひたすら待ちます。（あ）
- 30歳を過ぎて、友人との会話の内容に変化がでてきました。学生時代は同じような個人の悩みを語り合っていましたが、今は仕事や家庭のことを語り合っています。共感することは減り、尊重しあうことが増えました。これから更にどんな変化があるのか…楽しみの1つです。（い）

［キャロマグ］
Vol.20 / Mar.2024

発行日
2024年3月31日

発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4–1–1
Tel. 03-5432-1526
https://setagaya-pt.jp

世田谷パブリックシアター芸術監督
白井 晃

企画・編集
恵志美奈子、九谷倫恵子、
塩原由香理、石川惠理、中村麻美
（以上、世田谷パブリックシアター学芸）

協力
岡田陽子、山本雅幸

デザイン
和田みさき

デザインコンセプト・マンガ
株式会社ウチカワデザイン

印刷・製本
株式会社リヒトプランニング

後援
世田谷区

文化庁文化芸術振興費補助金
舞台芸術等総合支援事業
（劇場・音楽堂等機能強化総合支援）
独立行政法人日本芸術文化振興会

通算第20号　2024年3月31日発行　（公財）せたがや文化財団・世田谷パブリックシアター
〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階　Tel. 03-5432-1526　https://setagaya-pt.jp

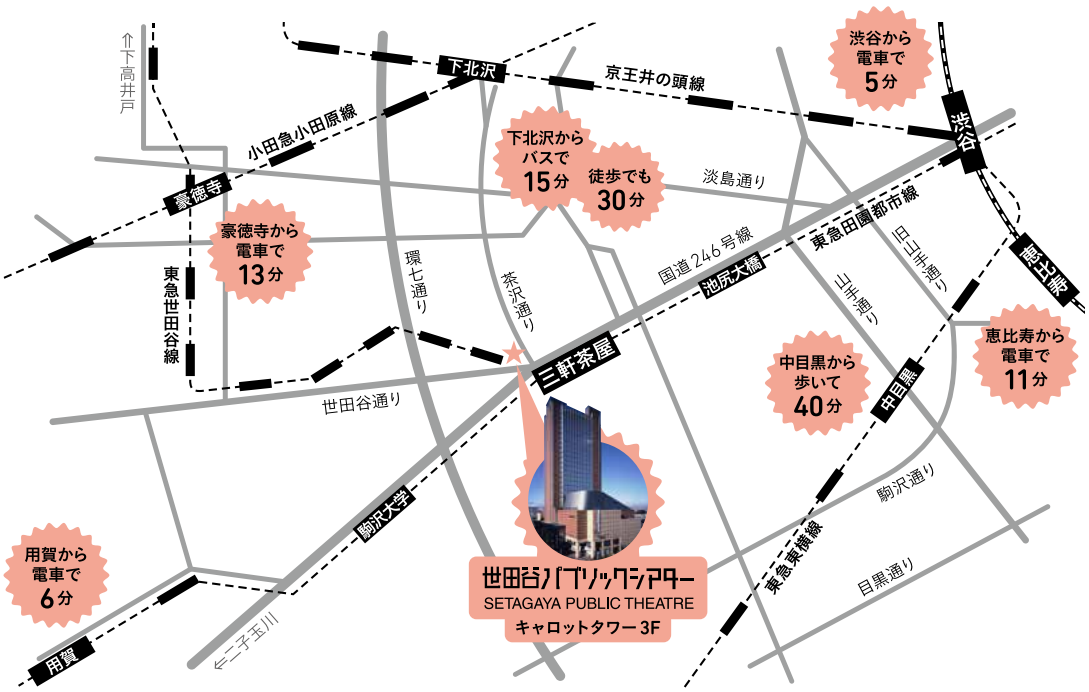
世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、（公財）せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター（約600席）、シアタートラム（約200席）の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。

世田谷パブリックシアター（主劇場）

シアタートラム（小劇場）

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ　世田谷パブリックシアター
〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階
Tel.**03-5432-1526**（代表）　Fax.**03-5432-1559**
https://setagaya-pt.jp

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅前にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。